

令和6年(2024年)職場における熱中症による 死傷災害(休業4日以上)の発生状況(確定値)

<神奈川労働局>

1 熱中症による死傷者数の推移

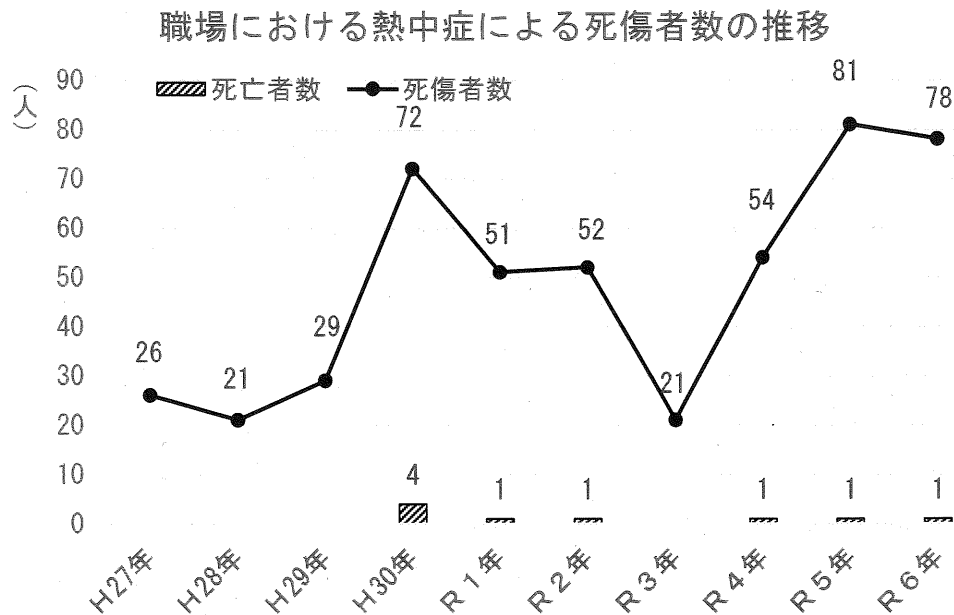
過去10年間の熱中症による死亡者及び休業4日以上の上業務上疾病者の数(以下合わせて「死傷者数」という。)は、以下のとおりである。

令和6年の死傷者数は78人と、前年に比べ若干減少したものの、過去10年間で2番目に多い数字となった。また、死亡災害も3年続けて発生した。

職場における熱中症による死傷者数の推移(人)

H27年	H28年	H29年	H30年	R1年	R2年	R3年	R4年	R5年	R6年
26 (0)	21 (0)	29 (0)	72 (4)	51 (1)	52 (1)	21 (0)	54 (1)	81 (1)	78 (1)

※()内の数値は死亡者数であり、死傷者数の内数である。



2 業種別発生状況

過去5年間(令和2~令和6年)の業種別の熱中症の死傷者数をみると、最多は運輸交通業と貨物取扱業を合わせた運送業で、これに建設業、製造業などが続いている。

なお、警備業における熱中症災害の大半は、建設工事現場での交通誘導業務におけるものである。

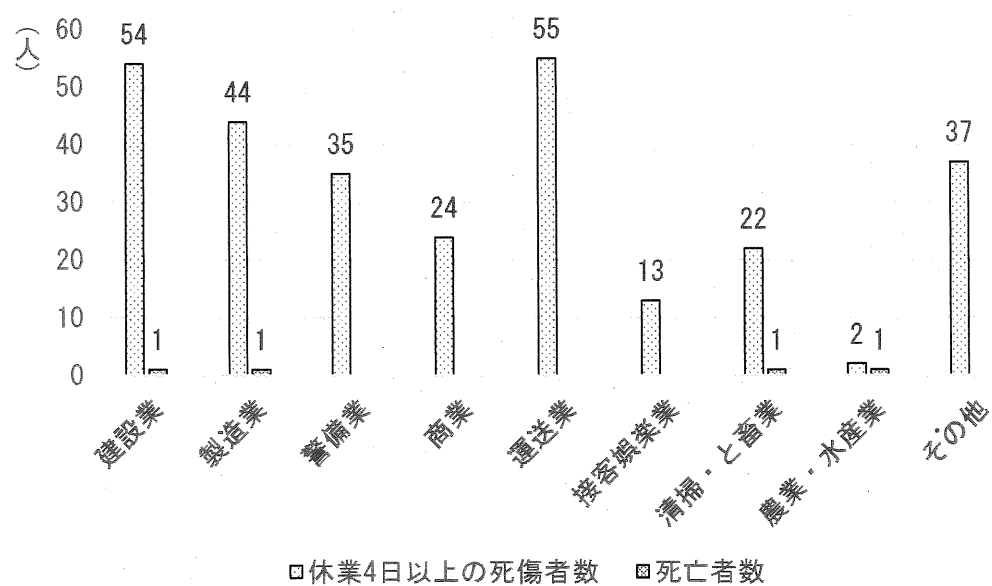
令和5年は、上記の熱中症災害多発業種のうち運送業、製造業及び建設業で大幅に増加したが、令和6年は若干減少したものの、この3業種で全体の半数以上を占めている。

熱中症による死傷者数の業種別の状況（令和2～同6年）（人）

	建設業	製造業	警備業	商業	運送業	接客 娯楽業	清掃・ と畜業	農業・ 水産業	その他	計
R2年	9 (0)	5 (0)	7 (0)	3 (0)	10 (0)	1 (0)	7 (1)	1 (0)	9 (0)	52 (1)
R3年	3 (0)	5 (0)	4 (0)	1 (0)	3 (0)	1 (0)	1 (0)	0 (0)	3 (0)	21 (0)
R4年	11 (1)	7 (0)	12 (0)	8 (0)	7 (0)	3 (0)	4 (0)	0 (0)	2 (0)	54 (1)
R5年	18 (0)	17 (0)	6 (0)	6 (0)	19 (0)	3 (0)	3 (0)	1 (1)	8 (0)	81 (1)
R6年	13 (0)	10 (1)	6 (0)	6 (0)	16 (0)	5 (0)	7 (0)	0 (0)	15 (0)	78 (1)
計	54 (1)	44 (1)	35 (0)	24 (0)	55 (0)	13 (0)	22 (1)	2 (1)	37 (0)	286 (4)

※（ ）内の数値は死亡者数であり、死傷者数の内数である。

熱中症による業種別死傷者数（令和2～同6年）



3 月・時間帯別発生状況

(1) 月別発生状況

令和2年以降の月別の熱中症の死傷者数をみると、全体のほぼ半数が8月に発生し、これに7月発生分を合わせると全体の8割以上となる。また、死亡災害4件は6月から8月に発生している。

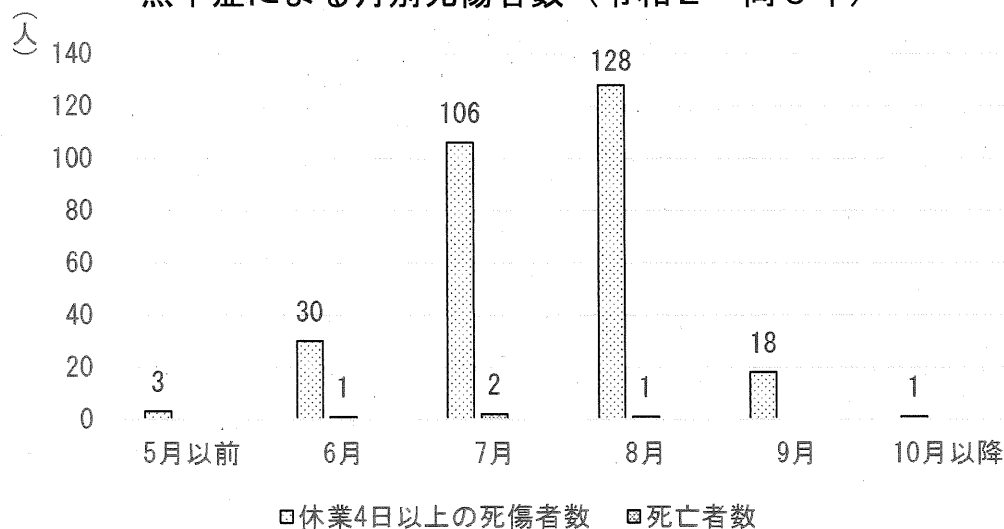
令和6年は、過去5年間の傾向どおり7月、8月に集中している。また、死亡災害も7月に発生している。発生日の最も早い災害は6月上旬で、最も遅いものは9月中旬であった。

熱中症による死傷者数の月別の状況（令和2～同6年）（人）

	5月 以前	6月	7月	8月	9月	10月 以降	計
R2年	1 (0)	4 (0)	6 (0)	34 (1)	6 (0)	1 (0)	52 (1)
R3年	0 (0)	1 (0)	6 (0)	13 (0)	1 (0)	0 (0)	21 (0)
R4年	1 (0)	17 (1)	14 (0)	20 (0)	2 (0)	0 (0)	54 (1)
R5年	1 (0)	6 (0)	34 (1)	37 (0)	3 (0)	0 (0)	81 (1)
R6年	0 (0)	2 (0)	46 (1)	24 (0)	6 (0)	0 (0)	78 (1)
計	3 (0)	30 (1)	106 (2)	128 (1)	18 (0)	1 (0)	286 (4)

※（ ）内の数値は死亡者数であり、死傷者数の内数である。

熱中症による月別死傷者数（令和2～同6年）



(2) 時間帯別発生状況

令和2年以降の時間帯別の死傷者数をみると、11時台で最も多く発生し、14時台が続いているが、日中だけではなく9時台以前及び18時台以降にも多数発生している。また、日中の現場作業終了後に会社事務所に帰ってから、又は帰宅してから体調が急変・悪化したというケースも散見される。

令和6年は、10時台の発生が最も多かったが、比較的涼しい時間帯でも油断できない状況となっている。

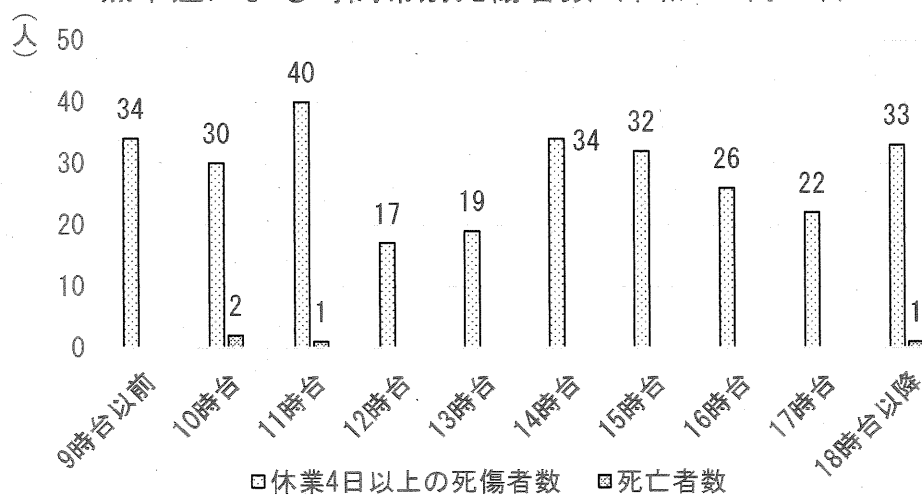
熱中症による死傷者数の時間帯別の状況（令和2～同6年）（人）

	9 以 時 前 台	10 時 台	11 時 台	12 時 台	13 時 台	14 時 台	15 時 台	16 時 台	17 時 台	18 以 時 降 台	計
R2年	3 (0)	3 (0)	7 (0)	3 (0)	3 (0)	7 (0)	7 (0)	5 (0)	5 (0)	9 (1)	52 (1)
R3年	0 (0)	3 (0)	4 (0)	3 (0)	1 (0)	0 (0)	2 (0)	2 (0)	3 (0)	3 (0)	21 (0)
R4年	11 (0)	5 (1)	6 (0)	0 (0)	4 (0)	10 (0)	8 (0)	2 (0)	2 (0)	6 (0)	54 (1)
R5年	10 (0)	6 (0)	13 (1)	8 (0)	6 (0)	8 (0)	7 (0)	9 (0)	4 (0)	10 (0)	81 (1)
R6年	10 (0)	13 (1)	10 (0)	3 (0)	5 (0)	9 (0)	8 (0)	8 (0)	7 (0)	5 (0)	78 (1)
計	34 (0)	30 (2)	40 (1)	17 (0)	19 (0)	34 (0)	32 (0)	26 (0)	22 (0)	33 (1)	286 (4)

※ 9時台以前は0時台～9時台、18時台以降は18時台～23時台を指す。

※ () 内の数値は死亡者数であり、死傷者数の内数である。

熱中症による時間帯別死傷者数（令和2～同6年）



4 令和6年の熱中症による死傷災害の特徴

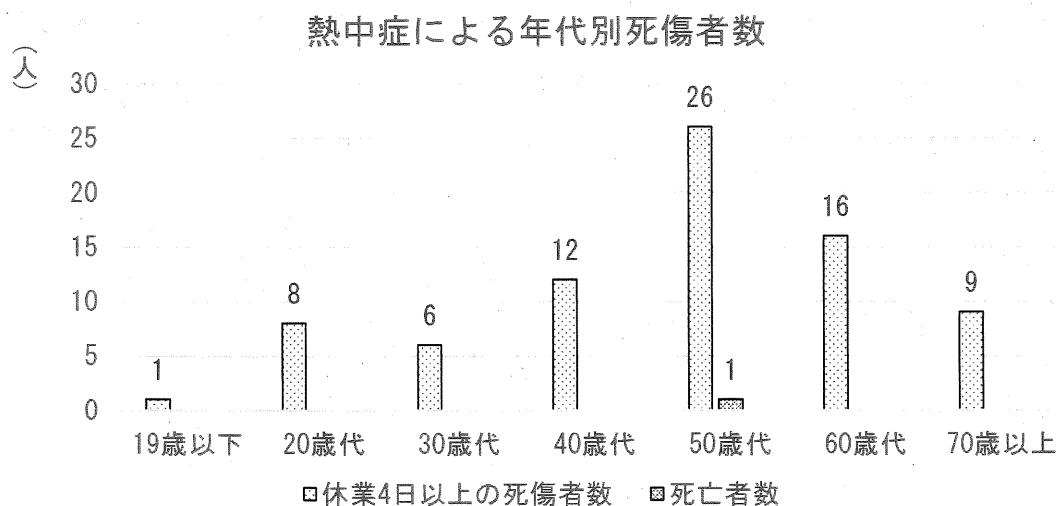
(1) 年代別の発生状況

年代別の死傷者数をみると、例年、50歳代以上の被災者の割合が全体の5割を超える状況が続いていたが、令和5年・令和6年と、50歳以上の被災者の割合がほぼ6割と、この傾向がより顕著になった。

熱中症による死傷者数の年代別の状況（人）

	19歳以下	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳以上	計
死傷者数 (人)	1	8	6	12	26(1)	16	9	78(1)
割合 (%)	1.3	10.3	7.7	15.4	33.3	20.5	11.5	100.0

※（ ）内の数値は死亡者数であり、死傷者数の内数である



(2) 屋外作業・屋内作業別の発症状況

令和6年にあつては、熱中症罹患時に従事していた作業が屋外作業か屋内作業かの作業別発生状況は、前年（令和5年）同様、全体として屋外作業と屋内作業の比率が概ね2対1となり、前年と比べ屋外作業の割合が増加した。

ただし、例年、製造業は作業別で屋内作業の割合が高い業種であり、令和6年もこの傾向は変わらず、工場内での発生が多くなっている。

令和6年にあつても、前年同様、熱中症災害全体の約1/3は屋内作業において発生しているが、炉や厨房等といった特別な熱源はなくても、窓等がないかあつても締め切っているといった部屋や倉庫等の通風が不十分で高温多湿になる危険性の高い環境下において多発している。

屋外作業はもとより、屋内作業においても、熱中症予防対策にしっかり取り組む必要がある。

5 令和2年以降の熱中症による死亡災害の概要

番号	発生年月 発生時刻	業 種 事業場規模	起因物 事故の型	発 生 概 要
1	令和2年 8月 18時頃	清掃・と畜業 (産業廃棄物 処理業) 50名～99名	高温、低温環境 高温・低温の 物との接触	夏休み明けの初日、焼却炉を稼働する準備作業において、高温環境下で、炉内の補修材をミキサーで練る作業をしていたところ、泡を吹いて心停止状態で倒れていたのを同僚に発見された。(熱中症)
2	令和4年 6月 10時頃	建築工事業 ～9名	高温、低温環境 高温・低温の 物との接触	2階建て木造住宅の外部足場を約1時間かけて解体後に、熱中症による体調不良となり病院へ搬送されたが、十数日後に死亡した。 発症時は気温31.7℃、湿度59パーセント(WBGT値27℃相当)であった。 被災者は入社以降の現場作業が通算3日目であった。
3	令和5年 7月 12時頃	農業 ～9名	高温、低温環境 高温・低温の 物との接触	被災者は、10時の休憩明けから、スポーツ施設敷地内で剪定等の植栽管理作業を一人で行っていた。休憩まで一緒に作業をしていた代表者が現場に戻り、倒れている被災者を発見、救急搬送されたが、熱中症により死亡した。
4	令和6年 7月 10時頃	その他の製造業 (クリーニング 業) 100人～299人	高温、低温環境 高温・低温の 物との接触	工場内で作業中、体調が悪くなり、熱中症の疑いがあったことから病院に搬送された。診察の結果、脱水症状及び血圧低下の診断を受け入院したが、翌日の朝、熱中症を原因とした急性心筋梗塞で死亡した